

地方の新たないぶき!!

明星大学経済学部教授

関 満博

地場産業から独自領域に向かう

——ストローの里の老舗企業の転換「シバセ工業」

岡山県浅口市（旧鴨方町）

飲料を吸い込むためのストローは、

現在では合成樹脂のPP（ポリプロピレン）製が用いられているが、数十年前は麦わらの茎を使っていた。現在、

日本国内の産地は岡山県浅口市（旧鴨方町）であるが、

6社に減っている。平成に入る頃までは30〜40社が立地する地域の地場産業であったのだが、

全体的には付加価値の低い製品であることから、一気にアジア製品に代替されていった。

その中で、従業員33人（男性10人、女性23人）を抱えるシバセ工業が多様なストロー製造を展開していた。社長は磯田拓也氏（1960年生まれ）で、

3代目の養子、元はモーターの日本電

産の技術者であったと語っていた。

● ● ●

ストローの歴史と浅口市（鴨方町）

ストローの歴史は古く、メソポタミアの歴史に「ビールを飲む際に使っていた」とされている。このほかに麦の茎を利用したものとしては、

麦稈真田ばくかんまらが知られている。籠や麦わら帽子として利用されてきた。

この麦稈真田を明治の中頃、岡山県高梁市たかひらの人が東京から持ち帰ってきた。広島県東部から岡山県西部にかけては当時、

麦作が盛んであり、刈り取った後の廃物利用を考えていた。地元では、

精麦した後の茎は捨てていたの

屋上にはNEDOとの共同事業で太陽光パネルを張る

磯田拓也氏



屋上にはNEDOとの共同事業で太陽光パネルを張る



磯田拓也氏

であった。麦稈真田から真田紐まらひもを作り、あるいは、麦わら帽子、ストローを作っていた。

鴨方でストロー製造を開始したのは1901（明治34）年とされている。戦前、戦後を通して麦わらのストローは広く普及したが、昭和30年代の中頃に合成樹脂のPP製が一気に普及し、麦わらの飲料用ストローは消え去っていった。

この浅口の旧鴨方町役場の近くに、シバセ工業が立地していた。創業は1926（大正15）年、地元の芝勢家が精米業としてスタートしている。戦後は1949年、精米に加え、もう1つの地場産業であった素麺加工業として芝勢興業株を設立している。ストローの世界に入ったのは2代目の頃であり、1969年にストローの生産を開始している。

現在のシバセ工業社長の磯田氏は大分大学工学部エネルギー学科を卒業、日本電産に入社する。芝勢家とは親戚関係であり、子供のいない2代目社長から後継者として誘われた。1995年に誘われた頃は、まだストロー生産は好調であった。「3年待ってもらい」シバセ工業に入り、社長に就くと、ス

トロー事業は相当に辛いものになってきた。

海外製品が大量に入ってきていた。特に韓国勢が強く、中国、インドネシア工場で大量に作り、日本にも輸出してきた。ファストフードのマクド



ストローの押出成形



ストローを袋に入れる

ナルドが象徴的だが、月に4000万本も使用している。

ストローには長さ、太さ、ジャバラ入り、スプーンタイプなど細かく分けると300種もある。多くの部分を海外企業にとられながらも、従業員33人を抱えるシバセ工業は多様な取り組みを重ねている。

●工業用パイプとしての ●利用可能性

磯田氏が引き継いだ頃は、主力ユーザーのグリコが箱入りジュースのストローを2段式に変えた頃であり、売上額は急減していった。シバセ工業にはそのための設備がなかった。最大6億円ほどの売上規模であったのだが、その後は2〜3億円に低下している。

このような事情の中で、モーターの開発技術者であった磯田氏は「ストローは極薄のパイプ」という点に気づいていく。世の中のパイプにこれほど薄いものはなかった。自社のホームページの商品紹介で、「飲料用ストロー」に加えて「その他のストロー」と紹介したところ、工業用パイプとしての問い合わせがくるようになった。ユーザーが極薄のパイプを求めていたのである。

このことから、磯田氏はホームページの商品紹介の部分を「飲料用ストロー」「工業用ストロー」と大きく2つの商品群にまとめ直したところ、さらに問い合わせがくるようになった。具体的な使用例としては、キャップ、医療用使い捨てスポイト、カテーテルカバリー、ポンプ用ノズル、ノイズシールドパイプ、化粧筆キャップなど、ユーザーからの問い合わせにより新たな領域が切り開かれていった。

この工業用ストローの部分は現在まだ売上額の8%程度だが、大きく化けていく可能性が高い。使い方がまだよくわからないという状況であろう。このようなものはユーザーが使い方を考えてくれる場合が少なくない。シバセ工業の会社案内には「まずはお問い合わせください。仕様・数量に応じてお見積りいたします」と記されている。

開発技術者である磯田氏は、このほかにもモーター設計、電子回路設計、配線設計などの電子事業にも踏み込んでいる。この領域はかつての日本電産で経験を深めたものであり、ストロー事業とは別に新たに起こした。また、工場の屋根には太陽光パネルが張りめぐらされ、2009年には発電事業に

も踏み込んでいる。

地方の伝統的な地場産業を引き継ぎ、磯田氏は「会社は存続させねばならない」として、従来事業を守りながらも新たな可能性に向かっていく。飲料用ストローが「超極薄の工業用パイプ」という発想は際立ったものであり、今後、多くの可能性を導き出すものとして興味深いものである。

地方の伝統的な地場産業の中には、1つの時代が終わったことを痛感させるものも少なくない。だが、角度を変えてみると、従来とは違った存在意義のあることがある。そのような視点で、事業を改めて見つめ直していくことも必要なのであろう。



電子機器の設計開発も行う